

埼玉県における古代瓦の諸問題(2)⁽¹⁾

宮 昌 之

3. 古墳の終焉と初期寺院

全国に存在する古墳の数は20万基とも30万基ともいわれ、関東地域の古墳数は4万基を超えると予想される。埼玉県では、平成元年から5年にかけて、県教育委員会が主体となり、県内市町村教育委員会の協力を得て、さきたま資料館が古墳の詳細分布調査を実施した。その結果、総数4696基(内訳：前方後円墳131、前方後方墳7、円墳3953、方墳97、上円下方墳2、八角墳2、横穴墓297、不明197)の存在を確認することができた⁽²⁾。また、古代瓦は関東地方で600か所を超える遺跡からの出土があり、埼玉県では160か所以上の遺跡から出土している⁽³⁾。本項ではこれらの調査結果を参考に、後期後半～終末期古墳と寺院を中心とした瓦出土地の関係を概述したい。

本来であれば各古墳の時期を求め、その分布を明確にする必要があるが、調査が実施されている古墳は少なく、個々の古墳の年代を決めることは困難である。そこでこれまでの研究で出土遺物・遺構等から、時期を後期後半以降に推定できる古墳について抽出してみることにする。主体部の確認できない古墳の時期決定には慎重を期す必要があるが、埴輪・須恵器・土師器及び既出の副葬品等の年代および調査カードを参考に先学の研究成果を踏まえて選び出した⁽⁴⁾。

表1～3は、当館で保管している詳細分布調査の調査カードに基づいて、対象とした期間の古墳を墳形別に規模の大きいものから順に一覧したものである⁽⁵⁾。6世紀中葉以降の前方後円墳を全長で見ると、50m～55mと80m～90mの間の規模の古墳が無い。円墳は直径80mを超える規模は行田市八幡山古墳⁽⁶⁾に限られ、次は50m～63mの間に集中し、64m～80mまでの間と、43m～50mの間の規模の古墳が無く、前方後円墳と同様に、規模の決定に何らかの規制があった様子が想定できる。方墳に関しては古墳の絶対数が少ないが、現状では35m付近に規模の境を読み取ることができる。これは土量に換算すると円墳にみられる大規模と中規模の境に近似する。

これら古墳に終末期の小規模古墳と奈良時代中頃以前の瓦が出土した遺跡⁽⁷⁾を加えて地域的な分布をみたのが、表4と第1図で、結果は次のようになる(下線付きは7世紀代の創建)。

- 1 大・中規模古墳から継続して、終末期の古墳が存在する。

大仏廃寺、西別府廃寺、勝呂廃寺

- 2 大・中規模古墳から継続して、方墳を含む終末期の古墳が存在する。

岡廃寺、旧盛徳寺

- 3 中規模古墳から継続して、終末期の古墳が存在する。

城戸野廃寺

- 4 大・中規模古墳はないが、終末期の古墳が存在する。

皂樹原遺跡、五明廃寺、馬騎の内廃寺、寺谷廃寺、山王裏遺跡、小用廃寺、大久保領家道場寺院跡

5 寺院はあるが、古墳がない。

大寺廃寺、若宮遺跡

後期後半に有力な首長墓あるいはそれに次ぐであろう規模の古墳が分布している地域は30か所あるが、そのうち、周辺に古代の寺院跡が確認されているのは熊谷市西別府廃寺、坂戸市勝呂廃寺、上里町・神川町自樹原遺跡、岡部町岡廃寺、美里町大仏廃寺、神川町城戸野廃寺、行田市旧盛徳寺で、残りは瓦葺寺院建立へ継続した状況が認められない。古代瓦の出土地側からみた周辺の古墳分布状況（表4の下）でみると、霊亀2年（716）に建郡された高麗郡内の寺院を除き、後期後半～終末期の直径30m以下の規模の古墳を主体とする古墳群に囲まれている例が多い⁽⁸⁾。

寺院周辺における最終末の古墳の造墓時期や、寺院の確実な創建時期が確定できない段階で論ずることに問題はあるが、終末の古墳と年代的に重複するか直後に建立されたと考えられる7世紀代創建の寺院と、寺院の造営開始までの間に空白期間が生じている8世紀代創建の寺院がある。また、初期寺院と関連する可能性の高いとされる方墳が隣接して認められる例は少なかった。

推古2年（594）に三宝興隆の詔⁽⁹⁾が発せられたことにより、寺院の造営が推奨され、畿内を中心に多くの寺院が造営されていた。当地方に仏教が伝えられた時期は定かではないが⁽¹⁰⁾、埼玉県内で寺院が造られるようになるのは、7世紀第2四半期と考えられている百済系の軒丸瓦を出土した寺谷廃寺からである⁽¹¹⁾。

7世紀中頃には、舒明天皇が東国の住民を参加させて天皇の氏寺である百済大寺を造営し、改新後右大臣となった蘇我倉山田石川麻呂は山田寺の造営を始めていた。山田寺で葺かれた瓦の系統の軒丸瓦（山田寺式）が、東海道から関東地方の寺院で多く採用されていることは、改新後の中央政権による東国政策の浸透の現れと考えられているが、この系統の瓦を用いた寺院跡は武蔵国をはじめ、相模・下野・常陸国では確認されていない⁽¹²⁾。

7世紀後半には、天智元年（662）に百済が、同7年（668）に高句麗が相次いで滅亡し、多くの亡命者があった。天智5年（666）から持統4年（690）頃までに、武蔵国をはじめ下毛野国や常陸国に百済人や新羅人・高麗人の僧尼等が移り住んでいる記録がある⁽¹³⁾。この中には造瓦や造寺・鍛冶工人も含まれていたであろう。後に記す『日本霊異記』にみられるような、公的な記録に残らないが、寺院建立のための技術者を招来して造寺することも多かったと考えられる。奈良時代以前は彼ら渡来人の技術による造瓦・造寺が主体であったことは瓦当文様の系譜からもわかる。

初期の地方寺院の状況は発掘調査や出土遺物等によりある程度つかむことができるが、通称『日本霊異記』と呼ばれる『日本国現報善悪霊異記』（①～⑥）や『出雲国風土記』（⑦）などの文献資料からも様子をうかがうことができる。長くなるが関連箇所を抽出して参考としたい⁽¹⁴⁾。

- ①上巻第七 禪師弘濟は百済の国の人なりき。百済の乱れし時に当りて、備後三谷郡の大領の先祖、百済を救はむが為に遣はされて旅に運びき。時に誓願を發して言さく、「若し、平らかに還りをはらば、諸の神祇の為に伽藍を造り立て、多に諸の寺を起しまつら」とまうす。遂に災難を免れき。即ち禪師を請けて、相共に還り来る。三谷寺は、その禪師の造り立てまつりしところの伽藍なり。（後略）
- ②上巻第十七 伊予国越知郡の大領の先祖、越智の直、まさに百済を救はむが為に、遣はされて到り運びし時に、唐の兵に擒はれ、その唐の国に至りき。（中略）朝廷これを聞きて、召して事の状を問ひたまふ。天皇たちまに矜れびて、樂ふ所を申さしめたまふ。ここに越智直言さく、「郡を立てて仕へまつらむと

おもふ」とまうす。天皇許可したまふ。然る後に郡を建て寺を造りて、すなはちその像を置きまつりき。
(後略)

- ③中巻第九 大伴赤麻呂は、武蔵国多磨郡の大領なりき。天平勝宝元年己丑冬十二月十九日に死に、二年庚寅夏五月七日に、黒斑なる犢に生れぬ。自ら碑文を負ひたり。斑なる文を探るに謂はく、「赤麻呂は、己が造れる寺を檀りて、恣なる心の隨に、寺の物を借り用ゐて、報い納めずして死に亡す。この物を償はむが為の故に、牛の身を受けたり」といへり。(後略)
- ④下巻第十七 沙弥信行は、紀伊国那賀郡弥氣の里の人なりき。俗姓は大伴連の祖これなり。俗を捨てて自度し、鬢髪を剃除し、福田衣を着て、福行の因を求めき。その里に一つの道場有り。号は弥氣の山室堂といふ。その村の人等、私に造れる堂なるが故に、以て字とす法名を慈氏禪定堂といへり。未だ作りをはらぬ捻撰の像二体有り。弥勒菩薩の脇士なり。臂・手折れ落ちて、鐘堂に居く。(後略)
- ⑤下巻第二十三 大伴連忍勝は、信濃国小県郡嬢の里の人なりき。大伴連ら、心を同じくして、その里の中に堂を作り、氏の寺とせり。忍勝、大般若経を写さむとおもひしがために、願を発して物を集め、鬢髪を剃除り、袈裟を着、戒を請けて道を修し、常に堂に住めり。宝龜五年の甲寅の春三月に、たちまちに人に讒ぢられて、堂の檀越に打ち損はれて死にき檀越はすなはち忍勝の同じ属なり。(後略)
- ⑥下巻第二十八 紀伊国名草郡貴志の里に、一つの道場有り。号をば貴志寺といふ。その村の人等、私の寺を造れるが故に、以て字とせり。白壁の天皇のみ代に、一の優婆塞有りて、その寺に住りき。(中略)その時に塔の木有り。未だ造らずして、淹しく仆れ伏して朽ちたり。「これ塔の霊ならむか」とうたがえり。(中略)明くる日に早く起きて、堂の内を見れば、その弥勒の丈六の仏像の頸、断れ落ちて土にあり。(後略)

- ⑦意宇郡 教昊寺 a) 舍人の郷の中にあり。郡家の正東廿五里一百廿歩なり。五層の塔を建立つ。僧あり。教昊僧が造るところなり。散位大初位下上腹首押猪が祖父なり。
- 新造の院一所 b) 山代の郷の中にあり。郡家の西北のかた四里二百歩なり。嚴堂を建立つ。僧なし。日置君目烈が造るところなり。出雲の神戸の日置君猪麻呂が祖なり。
- 新造の院一所 c) 山代の郷の中にあり。郡家の西北のかた二里なり。嚴堂を建立つ。住める僧一軀なり。飯石郡の少領出雲臣弟山が造るところなり。
- 新造の院一所 d) 山國の郷の中にあり。郡家の東南のかた卅一里一百廿歩なり。三層の塔を建立つ。山國の郷の人、日置部の根緒が造るところなり。
- 楯縫郡 新造の院一所 e) 沼田の郷の中にあり。嚴堂を建立つ。郡家の正西六里一百六十歩なり。大領出雲臣太田が造るところなり。
- 出雲郡 新造の院一所 f) 河内の郷の中にあり。嚴堂を建立つ。郡家の正南一十三里一百歩なり。舊の大領日置臣布彌が造るところなり。今の太領佐底磨が祖父なり。
- 神門郡 新造の院一所 g) 朝山の郷の中にあり。郡家の正東二里六十歩なり。嚴堂を建立つ。神門臣等が造るところなり。
- 新造の院一所 h) 古志の郷の中にあり。郡家の東南のかた一里なり。本、嚴堂を建立つ。刑部臣等が造るところなり。
- 大原郡 新造の院一所 i) 斐伊の郷の中にあり。郡家の正南一里なり。嚴堂を建立つ。僧五軀あり。大領勝部臣虫麻呂が造るところなり。
- 新造の院一所 j) 屋裏の郷の中にあり。郡家の東北のかた一十一里一百廿歩なり。()層の塔を建立つ。僧一軀あり。前の少領額田部臣押嶋が造るところなり。今の少領伊去美が従父兄なり。
- 新造の院一所 k) 斐伊の郷の中にあり。郡家の東北のかた一里なり。嚴堂を建立つ。僧二軀あり。斐伊の郷の人、樋の伊支知麻呂が造るところなり。

『日本靈異記』はいわゆる仏教説話集で、仏教的な因果応報に関する記述部分と現実と思われる部分が交錯して記述されている。そのため後者の部分に関しても伝承や創作であることも十分考慮に入れる必要があるが、記載されている地方寺院が実際に存在していることが確認された例もあり、当時の地方寺院建立の一端を知ることができよう。『出雲国風土記』は天平5年(733)の年紀がみられ、和銅6年(713)の詔が発せられてからこの間にまとめられた記載時期が判明する貴重な資料である。以下、関連箇所について触れてお

きたい。

①に現れる禪師弘濟は、おそらく天智2年(662)の百濟滅亡によって大量に移住してきた百濟人の一人で、ここに現れる三谷寺は、広島県三次郡向江田町にある寺町廃寺を旧三谷郡内にある唯一の寺院跡であることから該当させている⁽¹⁵⁾。伽藍を造り立ての内容どおり、法起寺式の伽藍配置を有する寺院であったことも調査で判明している。大領の先祖の名は②のような記載がないが、同様な国造クラスの人物であったと推定される。

②にみられる越智直は『旧事本紀』によれば小市国造であった。郡を建て寺を造りての記述は、建郡に伴い造寺されるという関係が読み取れる。時期的には①と同じ百濟滅亡時期頃の話。改新以降造寺にあたって中央からの経済援助が受けられるようだが、その状況は不明で、この記録からは全くの私寺か援助をうけた一種官寺的な寺院かの判断は難しい。

③の大伴の赤麻呂は、天平勝宝元年(749)に亡くなった多磨郡の大領と記されている。「寺の物を借り用ゐて、報い納めずして…」の部分からこの寺は郡寺のようにみえるが、⑤のような氏寺の可能性もある。同じ多磨郡に所在する武蔵国分寺は、近年の研究で天平13年(741)に国分寺建立の詔が発せられたのち、天平宝字元年(757)まで造営が費やされたとされる。広大な多磨郡内に、国分寺完成以前の大伴氏の氏寺が所在する可能性を残してるといえる記述である。

④は宝亀2年(771)以前に和歌山県那賀郡に弥気の山室堂という村の住民が造った道場があり、未完成の塑像が二体鐘堂に置かれている様子がみえる。示した内容の後には僧信行が僧坊を回る場面があり、弥勒菩薩の脇侍として塑像を置き、鐘撞堂と僧房が付属していることがわかる。

⑤は信濃国上田周辺に住む大伴連一族で建立した堂を、氏寺としたことが述べられている。宝亀5年は774年。

⑥は和歌山県和歌山市貴志の村人が、道場を造っている。さらに塔を造る予定で材料はあったが、造れず朽ちてしまった様子が記されている。宝亀年間(770~780)頃の記事？。

⑦では出雲国の奈良時代前半の寺院分布の様子を知ることができる。当時出雲国には9つの郡が存在していたが、寺院が所在していた郡は山側の2郡と半島先端の2郡を除いた5郡だけのものである。堂塔については『出雲国風土記』には嚴堂(金堂)と塔どちらかの記載があるだけなので、他の建物の存在は不明であるが、11か所の寺院のうち3か所(a・d・j)に塔の記載があることは注意されよう。造立者の内訳は、僧(a)、大領(e・f・i)、少領(c・j)、その他(b・d・g・h・k)である。cにみえる飯石郡少領出雲臣弟山は後の出雲国造、意宇郡大領に任ぜられた人物である⁽¹⁶⁾。

これらの記録から、初期寺院の建立背景が様々であったことがわかる。郡司が建てているものは公的な郡寺か彼ら一族の氏寺かは判断しかねるが、従来の古墳造営と同様に檀越となる在地豪族等一族の財力で建てている氏寺、知識で建立したのであろう地域の私寺があった。⑥やdの様な村人達や個人の私寺にも塔を建てたり、建てる計画があったことは注意される。そのほか経営困難になって中央の援助を受けて官寺化せざるをえなかった寺院などもあったであろう。古墳築造に向けられていたエネルギーが寺院造営に変わったことも少なからずあったと考えられるが、寺院は宗教的な部分が主体であることも忘れてはならない。

本項では国分寺造営時期以前の瓦出土地と、古墳分布との関連を概観することが主であったため、寺院個々の内容については触れなかった。建立にいたるまでの周辺の集落、造瓦工房集団等の歴史的環境をも含めた造立背景については次回で検討したい。

表1 前方後円墳一覽

古墳名()内は市町村	形	規模m	横	埴	須	土	特記事項
小見真観寺 (行田)	前	112	○				石槨出土遺物(冑・桂甲小札、鉄鏃、金環、頸頭大刀、圭頭大刀、銅鏡)
鉄砲山 (行田)	前	109	○	○	○	○	形象埴輪、二重周堀
天王山塚 (菖蒲)	前	107	○	○			角閃石安山岩
真名板高山 (行田)	前	104		○			二重堀
若王子 (行田)	前	103	○		○		角閃石安山岩、緑泥片岩、桂甲、鉄鏃、雲珠、杏葉、TK43型式須恵器
將軍山 (行田)	前	90	○	○	○	○	前方部にも直葬、房州石、乳文鏡、銅鏡、馬具、蛇行状鉄器、二重堀
中の山 (行田)	前	79		○			埴輪壺
とうかん山 (大里)	前	74		○	○	○	
瓦塚 (行田)	前	73		○	○	○	人物・楯持人物・家・馬・犬・水鳥形・鹿形埴輪等埴輪祭祀、二重堀
奥の山 (行田)	前	67		○	○		人物・馬形・鹿形・家形・器材形埴輪
毘沙門山 (羽生)	前	63	○	○			天井石を利用したと想定される板石塔婆あり
小堤山神 (川越)	前	63	○				両袖胴張石室、金環、剣
三鳥神社 (吹上)	前	60	○	○		○	緑泥片岩・房州石を使用した石室?
御廟塚 (羽生)	前	(60)	○				轡、陶棺
秋山諏訪山 (児玉)	前	60	○	○	○		直刀、鉄鏃、勾玉、管玉、小玉
お手長山 (岡部)	前	60	○				角閃石安山岩
洞山 (坂戸)	前	60	○	○	○		巨大な石材
三方塚 (行田)	前	58		○			
東裏 (菖蒲)	前	58		○	○	○	馬形埴輪
生野山16号 (美里)	前	58	○			○	河原石積片袖式石室
二子山 (熊谷)	前	55		○			
四十塚寅稲荷塚 (岡部)	前	50		○			角閃石安山岩
虚空蔵山 (行田)	前	50	○				緑泥片岩
東山遺跡1号 (大里)	前	48			○		ガラス玉
牛塚 (川越)	前	47	○		○	○	河原石積胴張石室、雲珠、金環、鉄鏃、直刀、刀子、金銅製指輪、玉
酒巻1号 (行田)	前	46	○	○	○		後円部に胴張石室2基あり、鉄鏃、鉄鏃、直刀、刀子、金環、馬形埴輪
白石銚子塚 (神川)	前	46	○	○			
秋葉塚 (東松山)	前	45	○				
目沼2号 (杉戸)	前	43	○				角閃石安山岩・砂岩使用の石室、下総国
広木大町9号 (美里)	前	43	○				
大仏二子塚 (美里)	前	43	○	○			形象埴輪
中新里諏訪山 (神川)	前	41	○	○	○	○	河原石積片袖式石室、馬具、直刀、勾玉、切子玉、形象埴輪
黒田2号 (花園)	前	41	○	○	○		動物埴輪、人物埴輪
ひさご塚 (桶川)	前	41	○	○	○	○	凝灰岩切片袖式石室、直刀、鉄鏃、鐿、輪鏝、辻金具、轡、人物埴輪
伊勢山 (熊谷)	前	41	○	○	○	○	直刀、轡、鉄鏃、刀子、金環、側壁凝灰岩、奥壁緑泥片岩
野原 (江南)	前	40	○	○			「踊る埴輪」、凝灰岩切片の石室、前後2か所に石室、直刀、刀子、鉄鏃
木の本10号 (深谷)	前	40	○	○			形象埴輪
大境南1号 (大里)	前	40	○		○		凝灰岩利用胴張石室、鉄鏃、直刀、耳環
安養寺南 (鴻巣)	前	40	○	○			
本村1号 (菖蒲)	前	40	○		○		天王山北遺跡
小沼耕地1号 (騎西)	前	39		○		○	二重堀、馬・猪・盾・人物埴輪、箱式石棺
広木大町8号 (美里)	前	39	○				
長沖十兵衛塚 (児玉)	前	37	○	○			長沖79号
南大塚4号 (川越)	前	36	○	○	○	○	切子玉、人物・鞆・鞆・大刀・馬・家形埴輪
長塚 (東松山)	前	36	○	○			前方部片袖式、後円部石槨、直刀、鉄鏃
大境南2号 (大里)	前	36	○		○	○	凝灰岩利用胴張石室、鉄鏃、短刀、耳環
酒巻15号 (行田)	前	34	○	○			人物・馬形埴輪、大刀、鞆・鞆
白石3号 (美里)	前	32	○	○			
円正寺2号 (滑川)	前	31	○	○			凝灰岩
西山5号 (岡部)	前	31	○	○			直刀、鉄鏃、勾玉、切子玉、ガラス玉、ガラス白玉
將軍塚 (鴻巣)	前	(30)		○			
中井1号 (北本)	前	30	○	○			砂質凝灰岩三味線形胴張石室、直刀、人物・形象埴輪
下小坂4号 (川越)	前	30超	○	○			円墳?、ガラス玉、銅釧、管玉、勾玉、水晶、直刀、人物埴輪
北塚原9号 (神川)	前	29	○	○			
三笠山7号 (本庄)	前	29	○	○			角閃石安山岩、馬・人物埴輪
大町両子塚 (美里)	前	28	○	○			
酒巻8号 (行田)	前	(27)	○	○	○	○	人物・馬形埴輪
長沖8号 (児玉)	前	26	○	○	○		鉄鏃、刀子、耳環
秋山塚原1号 (児玉)	前	25	○	○			
柏原4号 (桶川)	前	25	○	○		○	人物埴輪
南塚原9号 (神川)	前	25	○	○			

※形の前は前方後円墳、帆は帆立貝形古墳、円は円墳、上は上円下方墳、方は方墳、八は八角墳
横は横穴式石室、埴は埴輪の出土、須は須恵器の出土、土は土師器の出土

表2 円墳一覽

古墳名 () 内は市町村	形	規模m	横	埴	須	土	特記事項
八幡山 (行田)	円	80	○				三室構造胴張石室、緑泥片岩、角閃石安山岩、凝灰質砂岩、大刀、直刀、鉄鏃、銀製弓弭、乾漆器、漆塗木棺
山王塚 (川越)	上	63					墳形不確定
浅間塚 (行田)	円	58					墳形不確定、前玉神社
勝呂1号 (坂戸)	円	50~55	○				勝呂神社、石材露出
白山 (行田)	円	50	○				緑泥片岩、角閃石安山岩
浅羽1号 (坂戸)	円	50	○				土屋神社古墳、横穴巨石
稲荷町北 (深谷)	円	50	○				勾玉、金環、前方後円墳？
小島御手長山 (本庄)	円	42	○	○			角閃石安山岩、挂甲小札、直刀、鉄鏃、家・人物・馬形埴輪
酒巻14号 (行田)	円	42	○	○			馬を引く人と馬形埴輪、鬣形・大刀・靱埴輪
齊奈1号 (行田)	円	40		○			剣神社古墳
愛宕塚 (上里)	円	40	○				前方後円墳の後円部？
柏崎6号 (東松山)	円	40	○		○		直刀、刀子、鉄鏃、耳環、刀装具、管玉、白玉
原稲荷 (大宮)	円	40	○				緑泥片岩、砂岩
権現山 (熊谷)	円	38			○		提瓶
鹿島8号 (川本)	円	38	○				金環、鉄鏃、白玉
下唐子2号 (東松山)	円	37	○				凝灰岩截石胴張複室の石室、金環、銀環、勾玉、小玉、刀子、鉄鏃、馬具
稲荷塚 (大宮)	円	36					直刀、勾玉、人物・馬形埴輪
坊主山 (本庄)	円	36		○	○		直刀、鉄鏃、鏝、ガラス小玉、靱尻金具、靱口金具、滑石白玉
柏崎13号 (東松山)	円	36		○			稲荷塚古墳、(伝)人物埴輪
大塚 (川島)	円	36		○		○	砥石・箱式石棺
稲荷塚 (嵐山)	円	36	○		○		胴張り石室
四十坂浅間山 (岡部)	円	35	○				
水窪1号 (岡部)	円	35	○				
中条大塚 (熊谷)	円	35	○				複室構造、鉄鏃、勾玉、金箔塗漆木棺、金装銅製靱尻金具、小札
柏崎5号 (東松山)	円	35	○		○		直刀・刀子・鉄鏃・耳環・弓金具・小玉
木の本1号 (深谷)	円	35	○	○			
秋山庚申塚 (児玉)	円	34				○	鉄鏃、耳環、勾玉、管玉、白玉、馬具、直刀
楊井薬師寺1号 (熊谷)	円	32	○				
稲荷塚 (上里)	円	31		○			人物・馬形埴輪
長沖21号 (児玉)	円	31				○	鉄鏃、刀子、ガラス小玉、両頭座金付靱尻金具
浅間山 (上里)	円	30	○		○		角閃石安山岩、直刀、鉄鏃、銅鏡
丸山塚 (小鹿野)	円	30	○				
大塚 (皆野)	円	30	○			○	胴張石室
上原2号 (江南)	円	30	○				
柏崎4号 (東松山)	円	30	○		○		凝灰岩胴張石室、大刀、直刀、刀子、鉄鏃、耳環
茶臼塚 (大宮)	円	30	○				
台耕地稲荷塚 (大宮)	円	30	○				凝灰岩使用両袖形石室、太刀、刀子、鉄鏃、切子玉、ガラス小玉
柏崎12号 (東松山)	円	30		○			
塚の越1号 (坂戸)	円	30	○		○		人物・家・馬形埴輪
野本2号 (東松山)	円	30	○			○	凝灰岩切石胴張石室、耳環、鉄製品
下唐子3号 (東松山)	円	30		○			凝灰岩利用複室石室
三千塚Ⅷ-3 (東松山)	円	30			○		刀子、鉄鏃、杏葉、柄頭
山の神 (本庄)	円	30		○		○	人物埴輪
大興寺山 (美里)	円	30	○				

表3 方墳一覽

古墳名 () 内は市町村	形	規模	横	埴	須	土	特記事項
鶴ヶ丘稲荷神社(鶴ヶ島)	方	53	○				凝灰岩切石羽子板形石室
下忍宝養寺 (吹上)	方	45					(伝) 甕出土
戸場口山 (行田)	方	40	○	○			二重堀、外堀外辺7.5m、凝灰質砂岩、(伝) 大刀出土
前原愛宕山 (岡部)	方	37					
穴八幡 (小川)	方	32	○	○			緑泥片岩の切石、複室構造、(伝) 玉出土
八重塚2号 (北本)	方	30					西側のみ周堀
地藏塚 (行田)	方	28	○				角閃石安山岩・緑泥片岩利用の胴張石室、鉄鏃、側壁に線刻壁画
鶴ヶ丘1号 (鶴ヶ島)	方	27	○				乱石積胴張石室、棒状鉄製品
東谷 (本庄)	方	27	○				角閃石安山岩・緑泥片岩の奥壁、直刀
方墳大塚 (大宮)	方	25					
塩1支群27号 (江南)	方	24	○				
宮塚 (熊谷)	方	23					上円下方墳？
今宮1号 (与野)	方	20	○				凝灰岩、ガラス小玉、銅製飾り
塩1支群24号 (江南)	方	20	○	○			
八塚 (朝霞)	方	18		○			金環、二重堀
笹原裏1号 (熊谷)	方	15	○				鏝・銅製双脚金具、靱口金具
西原1号 (東松山)	方	13	○				鉄鏃・銅鏡・圭頭大刀墳群、川原石・緑泥片岩胴張石室
笹原裏2号 (熊谷)	方	11	○				
琵琶島 (大宮)	方	不明	○	○			砂質凝灰岩切石切組積石室？
狐塚 (朝霞)	方	不明					

表4 古墳集中地域・古代瓦出土遺跡一覧

No	地 域	大 規 模 古 墳	中規模古墳	周 辺 古 墳 群
1	神 川		前4	青柳古墳群・白岩古墳群・群馬県藤岡市三名川古墳群
2	美 里・児 玉	前1	前6	広木大町・秋山・羽黒山・大仏・猪俣古墳群
3	本 庄・上 里		前1 円2	旭古墳群・小島古墳群
4	本 庄 栗 崎		方1	生野山古墳群
5	岡 部 西 山		前1	西山古墳群・千光古墳群
6	岡 部	前1 方1	前1 円2	四十坂古墳群・白山古墳群
7	深 谷 原 郷	前1 円1	前1 円1	木の本古墳群
8	熊 谷 三ヶ 尻	前1	方1	三ヶ尻古墳群
9	羽 生 下 村 君	前1		村君古墳群*
10	羽 生 西	前1		羽生古墳群*
11	行 田 埼 玉	前3	前3 円2 方1	埼玉古墳群・若王子古墳群
12	行 田 若 小 玉	前1 円1	前1	若小玉古墳群
13	行 田 真 名 板	前1		
14	行 田 酒 卷		前2 円1	酒巻古墳群
15	行 田 小 見	前1	前1	小見古墳群*
16	吹 上	前1	方1	下忍古墳群*
17	鴻 巣 安 養 寺		前1	安養寺古墳群*
18	騎 西 種 足		前1	種足古墳群*
19	菖 蒲 栢 間	前1	前1	栢間古墳群・東裏古墳群*
20	花 園	前1	前1	花園古墳群
21	江 南 塩		方2	塩古墳群・岩根沢横穴墓
22	江 南・滑 川		前2	野原古墳群・天神山横穴墓・高根山横穴墓
23	熊 谷 伊 勢 山		前1	瀬戸山古墳群・天神山横穴墓
24	大 里・東松 山	前1	前5 円1	三千塚古墳群・比丘尼山横穴墓
25	鴻 巣・北 本		前3	馬室古墳群・北袋古墳群
26	北 本・桶 川		前2	方1
27	小 川		方1	
28	坂 戸 浅 川		円1	方1
29	鶴 ヶ 島		方1	方1
30	坂 戸 石 井	前1 円1		勝呂古墳群
31	川 越 小 堤	前1	前1	下小坂古墳群
32	川 越 的 場		前1	的場古墳群*
33	川 越 大 塚		前2	南大塚古墳群*
34	杉 戸		前1	目沼古墳群
35	大 宮		円2 方2	植水・側ヶ谷戸古墳群
36	与 野		方1	中島古墳群*
37	朝 霞		方1	内間木古墳群*

No	遺 跡 名	性 格	周 辺 古 墳 群	推定年代
a	神川町精進場遺跡	中世の配石	南塚原古墳群隣接	8 - II
b	神川町城戸野廃寺	寺院跡	城戸野古墳群内	8 - II
c	美里町大仏廃寺	寺院跡	木部山・大仏古墳群隣接、羽黒山古墳群 (0.7km)	8 - II
d	神川町・上里町白樹原遺跡	寺院跡	元阿保古墳群 (0.5km)、大御堂古墳群 (0.8km)	8 - II
e	上里町立野南遺跡・八幡太神南・熊野太神南遺跡	集落跡	本郷古墳群 (0.7km)、今井の古墳 (0.9km)、愛宕塚古墳 (1.2km)	7 - III ~ 8 - I
f	上里町五明廃寺	寺院跡	帯刀古墳群 (0.3km)、下郷古墳群 (0.8km)	8 - II
g	児玉町金草窠跡	窠跡	飯倉古墳群 (0.7km)	8 - II
h	岡部町寺山遺跡	窠跡?		8 - II
i	岡部町岡廃寺	寺院跡	白山古墳群 (0.5km)、お手長山古墳 (0.6km)	8 - II
j	熊谷市西別府廃寺	寺院跡	別府古墳群 (0.8km)、木の本古墳群 (1km)	7 - III
k	行田市盛徳寺	寺院跡	若王子 (0.4km)、埼玉 (1km)、若小玉古墳群 (1.7km)	8 - II
l	寄居町馬騎の内廃寺	寺院跡	箱石遺跡 (1.2km)、小前田古墳群 (1.7km)	7 - IV
m	川本町荷物鞍ヶ谷戸窠跡	窠跡	清水山 (0.3km)、鹿島古墳群 (0.7km)、ます塚 (0.7km)	8 - I
n	滑川町寺谷廃寺	寺院跡	表古墳群 (0.2km)、平古墳群 (0.3km)、	7 - II
	滑川町平谷窠跡	窠跡	大谷古墳群 (0.4km)、岩屋塚古墳群 (0.7km)、	7 - IV
	滑川町五厘沼窠跡	窠跡	唐子古墳群 (0.7km)、月輪神社古墳 (0.8km)	7 - ?
o	東松山市大谷瓦窠跡	窠跡	東山古墳群 (1.3km)、賢木岡古墳群 (1.3km)	7 - IV
p	東松山市山王裏遺跡	堂跡	野本古墳群内	7 - IV
q	東松山市緑山遺跡	集落跡	田木山古墳群 (0.3km)、駒堀・根平遺跡 (0.5km)	8 - I
r	鳩山町赤沼窠跡	窠跡	十郎横穴墓群 (1.2km)	7 - IV
s	鳩山町小用廃寺	寺院跡	西戸古墳群 (0.7km)、川角古墳群 (1.2km)	7 - IV
t	毛呂山町西戸丸山遺跡	窠跡?	西戸古墳群隣接、川角古墳群 (1.2km)	8 - II
u	坂戸市勝呂廃寺	寺院跡	勝呂古墳群内、新町 (0.7km)、塚越古墳群 (0.7km)	7 - IV
v	日高町大寺廃寺	寺院跡	西戸古墳群 (3.2km)	8 - II
w	日高町若宮遺跡	集落・寺院跡	上広瀬古墳群 (3.0km)	8 - I
x	浦和市大久保領家道場寺院跡・浦和市大泉院遺跡	寺院跡	大久保古墳群内	8 - II
y	庄和町貝の内遺跡 (下総国)	集落跡	木野川古墳群 (1.2km)	8 - III

*は7世紀代の古墳が含まれているか不確実な古墳群

【註】

- 1) 1は1992『埼玉県における古代瓦の諸問題(1)』『研究紀要』第14号 埼玉県立歴史資料館に掲載
- 2) 埼玉県立さきたま資料館1994『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』埼玉県教育委員会
- 3) 前掲1)
- 4) 古墳調査報告書および埼玉県刊行の『新編埼玉県史 資料編』2、『新編埼玉県史 通史編』1、該当する市町村の『市町村史』ほか、以下の論考を参考にした。
- 金井塚良一 1967 「後期古墳研究の諸問題——東松山市とその周辺古墳を中心にして——」『埼玉考古』第5号 埼玉考古学会
- 増田 逸朗 1977 「北武蔵における横穴式石室の変遷」『信濃』第29号第7巻
- 金井塚良一 1979 「比企地方の前方後円墳——北武蔵の前方後円墳の研究」『研究紀要』第1号 埼玉県立歴史資料館
- 金井塚良一 1980 「入間地方の前方後円墳——北武蔵の前方後円墳の研究(2)」『研究紀要』第2号 埼玉県立歴史資料館
- 塩野 博 1980 「埼玉の古墳」『埼玉の文化財』第20号
- 田中 広明 1983 「埼玉県比企地方における後・終末期古墳——特に截石切組積古墳の地域的特徴」『埼玉考古』第21号 埼玉考古学会
- 田中 広明 1986 「終末期古墳の地域性——関東地方の加工石材使用石室の系譜」『土曜考古』第12号
- 関義則・宮代栄一 1987 「県内出土の古墳時代の馬具」『埼玉県博物館研究紀要』第14号 埼玉県立博物館
- 塩野博・寺社下博・今泉康之 198 「第3節 荒川本流沿岸の古墳」『荒川』人文I 埼玉県
- 杉崎茂 樹 1989 「北武蔵の大規模群集墳の消長に関する一考察」『古代』第87号 早稲田大学考古学会
- 田中広明・大谷徹 1989 「東国における後・終末期古墳の基礎的研究(1)」『研究紀要』第5号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 山本 禎 1990 「東国における後期古墳——凝灰岩を石室とした横穴式石室について」『研究紀要』第7号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 塚田良道・太田博之 1990 「埼玉県の円墳」『古代学研究』第123号
- 杉崎 茂樹 1991 「古墳時代の北武蔵における有力首長層の動態」『古代探叢』Ⅲ 早稲田大学出版会
- 塩野 博 1991 「荒川中流域沿岸の古墳について——横穴式石室の変遷」『埼玉考古学論集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 増田 逸朗 1991 「埼玉政権の法量的分析」『埼玉考古学論集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 山本 禎 1991 「埼玉県における後期古墳の様相」『埼玉考古学論集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 島村薫・金沢文雄・高橋一夫 1993 『中川水系』人文 埼玉県
- 5) 古墳の大きさの決定には造営者の政治力・経済力が反映されていると想定し一覽したが、7世紀代に入ると30m前後の円墳であっても、副葬品から有力首長墳と考えられる古墳もある。葬制の時期的な変化や地域的な条件に左右されることも考慮に入れなければならない。
- 6) 小川良祐・金子真土 1980 「八幡山古墳石室復原報告書」埼玉県教育委員会
- 7) 各瓦出土の文献については前掲1)を参照していただきたい。行田市盛徳寺は8世紀第4四半期あるいは週末以降の年代を与えている研究者が多いが、出土遺物の中に凸面斜格子叩き・平行叩きなど、奈良時代前半にみられる叩き目を残す桶巻造りの平瓦がある。重郭文軒平瓦については、本寺跡出土と文様がやや異なるが、平城宮では第Ⅱ期(721~745)、下総・上総国分寺では創建期以前から創建期に位置づけられている。
- 奈良国立文化財研究所編 1975 『瓦編』2 解説
- 宮本 敬一 1994 「上総国分寺の成立——尼寺の造営過程を中心に——」『東海道の国分寺—その成立と変遷—』栃木県教育委員会
- 山路 直充 1994 『下総国分寺跡』市立市川博物館
- 8) 古墳と寺院はほぼ同様な地形上に立地するが、寺院左建立はその発願事情により、造られる場所も本貫地の場合や、先祖墓の近くの場合も考えられる。また、『日本霊異記』にみられるように、仏教を信仰しない豪族も多かったようで、彼らは寺院を建立しないのであろう。
- 9) 推古二年春二月丙寅朔「詔皇太子及大臣、令興隆三寶。是時、諸臣連等、各爲君親之恩、競造佛舍。即是謂寺焉」
- 10) 行田市將軍山古墳・小見真観寺古墳(6世紀第3四半期)、上里町浅間山古墳(第4四半期)、東松山市西原1号墳・行田市八幡山古墳(7世紀第2四半期)からは、本来仏具である銅鉢を出土しており、被葬者周辺に仏教が普及していた可能性を予想されるが、証明できない。銅鉢については、大谷徹 1991 「北武蔵出土の銅鉢」『埼玉考古学論集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に詳しい。
- 11) 既出の素弁八葉の弁に棒状の子葉が付くのではとの指摘もある。事実であれば時期を下げることになる。
- 12) 舒明十一年秋七月「詔曰、今年、造大宮及大寺、則以百濟川側爲宮處、是以、西民造宮、東民造寺、便以下書直懸爲大匠」舒明11年頃から皇極朝(639~645)にかけての造営といわれる。山田寺は舒明13年(641)に金堂が完成している。武蔵国では山田寺式の瓦が採用されておらず、亜流ともいえる棒状の子葉を付ける軒平瓦が創作されている。
- 13) 天智五年其是冬「以百濟男女二千餘人、居于東國」
天武十三年五月辛亥朔甲子「化來百濟僧尼及俗、男女并廿二人。居于武蔵國」
天武十四年冬十月の己丑「伊勢王等亦向于東國、因以賜衣袴」
持統元年夏四月甲午朔癸卯「筑紫太宰獻投化新羅僧尼及百姓男女廿二人。居于武蔵國、賦田受稟、使安生業」
持統四年二月壬申「以歸化新羅韓奈末許滿等十二人。居于武蔵國」
- 14) 『日本霊異記』は遠藤嘉基校注 1967 『日本霊異記』日本古典文学大系 70 岩波書店 及び小泉道校注 1984 『日本霊異記』新潮日本古典集成 新潮社を参照したが、訓読を一部変えている。
『出雲国風土記』は秋本吉郎校注 1958 『風土記』日本古典文学大系 2 岩波書店を参照した。
- 15) 脇坂光彦 1986 「寺町廃寺と瓦の文化」『日本の古代遺跡』26 広島 保育社
- 16) 前掲14) 秋本吉郎校注 1958 『風土記』日本古典文学大系 2 岩波書店